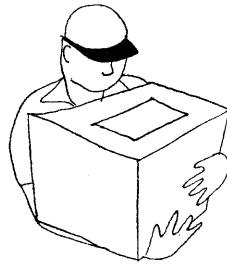


園長室の窓から

園内事故

六月から七月は園内事故の起こりやすい時期である。たいていのことにはしかるべく対処でき、父母の文句にも、教育委員会の苦言にもへこたれることはなくとも、園児の事故ばかりは気がめいり、時として、職を続ける自信を失うことすらある。

☆ ☆ ☆



市原豊子

南風に乗って雨が激しくふきつけた日、園内に湿気が充満し、廊下のビニタイルに結露した。良子が足をすべらせて転倒し、後頭部を激しく打ち、嘔吐して病院に運んだのは六月。京子が六人乗りブランコに三人で乗っていて降りようとしてバランスをくずし、ひざを座面の角にぶつけ、病院で処置の不適當さも加わって、完治に約一年間かかった事故も六月の末のことだった。時間帯は一〇時五〇分から昼

食までの間に起こることが多い。

事故はすりぎず、切りぎず、かみつきから骨折、打撲、捻挫、転落等様々であるが、防げるものと防ぎようのないものがある。なんでもない床で一人で転んで腕の骨を折った子や、跳箱を跳んで着地の時に捻挫を起こした子の場合などは防ぎようがない。結露するビニタイルの床の転倒は廊下の全面に絨毯を敷くことによつて解決がついた。

なかにはどうしてそういう事が起こったのか理解できないような事故が教師の目の前で起こったこともある。例えば、教師といっしょに机の上の観察ケースの中のザリガニを見ていた明夫が、「ぼく図鑑持つてくる」といった瞬間足をすべらせて、耳が机のへりに当って耳たぶが約一センチほどバックリ切れたことがあった。机の角がとがっていたわけではなかったのだが。

事故そのものは大したことがなくとも、同じ子どもに回数が増えたり、対処の仕方を誤ると解決は

むずかしくなる。訴訟沙汰にすらなかりかねない。あらゆる事故を通して教師の目の届いていなかった時の処理は困難である。わかっているものについては、すぐとんでいって処置できるし、状況を保護者に説明することもできる。見ていなかった者は事後処理が遅れ、親の不信をかい、信頼関係すら簡単にくずれる。いずれにせよ事故が起こってしまった場合は誠心誠意対処する以外に方法はない。

☆ ☆ ☆

短大の講座の中には、園内事故について、その発生源傾向や応急処置についての講義はあるのだろうか。幼稚園のどんな場所で、どんな状況の中で事故は起こりやすいのか、もし起こった場合にはまずどうしたらよいかなどについて一応の知識を持っていく必要がある。気楽な気分でも聞いた講義の知識が目の前で血を流し、泣く子を前にどれほど役に立つ

かは疑問もないではない。しかし新卒の教師が最初に出くわす打撃と挫折感は自分のクラスの子どもがけがをした時になりがちであることを考え合せると、なんらかの策を講じておかなければならないと思ふ。

けがが起こると動転して自信を失い、気持が落ち込む。するとけがは一件に止まらず、何件も続くことがある。園内に不安が広がると他のクラスには連鎖的に波及することもあるので、教師の気持の安定は極めて大切である。

けがや事故は、起こす子どもの側の旅行疲れや睡眠不足によることもある。一方、子どもを十分掌握できない教師の力量不足や、個人的な心配事などで保育に集中できにくい事情等によることもある。先生と子どもの信頼関係の育っているクラスは事故は比較的少ない。しかも、万が一起こっても父母の態度は好意的である。

「けがをすることなく安全に過せる」ということは幼稚園に子どもを入れる父母の最低の願いである。そして園にとっても、どんなに高邁な精神や理論があろうとも、事故が起こっては何にもならないことになってしまふ。

☆ ☆ ☆

梅雨のうっとうしさと、発散できないエネルギー、その上入園時は緊張がとれて、それぞれ地が出てくるこの季節は、担任も園長も気のゆるせない日が続くのである。

